
皇帝の仮面

茜鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝の仮面

【Nコード】

N5391Y

【作者名】

茜鷹

【あらすじ】

辺り一面燃える町。その中で自分の親であった2人の骸を見つけた。

不思議と涙は出ない。肉親を失う事を既に体験していたからだろうか？

しかし、込み上げてくる憎しみだけは止まらない。

奴らは許さない。俺の手で殺す。

そしてその夜、町は炎に包まれた。

——金色の炎によって…

二度全てを失った少年。彼は多くを語らない。ただひたすらに、胸に抱いた理想への答えを探していた。

誤字・脱字・おかしい点が多いかもしれません。その点をご注意ください。

初作品なのでどんな出来に仕上がるが分かりませぬが、楽しんで頂けたら幸いです。

燃える町

俺の周りでは、俺の育った町の燃える光景が広がっていた。

そして目の前には――

「俺に任せてお前は行け！こんな所で：お前を死なせやしない！」

右手に剣を握って構える親父の姿。刃は血に濡れて真っ赤に染まり、剣の持つ斬れ味を著しく低下させていた。

そして本来ならばあるはずの親父の左腕はもう存在していない。ここまで逃げるまでの間に、俺をかばった所為で魔物に食いちぎられてしまった。

左肩からは止めど無く血が溢れ、親父の足元に血溜まりをつくっている。

この状態で立っているだけでも相当な気力を使う親父が、足止めをして生き残れる可能性は薄い。

「無理だ！親父が死んじまう！」

だが、親父はそんな俺を剣を握ったままの拳で殴りつけた。全く意識していないまま拳を受けた俺はそのまま地面に叩きつけられた。

「分からないのか！？このままじゃ二人とも死ぬ！だったらお前だ

けでも逃げろ！」

「ふざけんな！お袋が死んで、それで親父まで死んで、俺だけ生き延びるなんて…納得できるかよ、そんな事！」

殴られた頬の痛みも忘れ、俺は目の前に立つ親父に怒鳴り返した。親父の言うこともわかる。でも、だからと言って俺の言っていることが間違っているとは思わない。自分が助かるために、誰かを犠牲にする。そんな生き方は俺はしたく無い。

俺は親父を説得しようと立ち上がったが、建物の上から殺気を感じ振り返る。そこには二本の鋭く大きな牙を生やした狼の様な魔物がいた。

咄嗟に剣を構え、同時に飛びかかってきた魔物と対峙する。

「どけっ！」

しかし、横から割り込んだ親父が魔物を斬り付け、その衝撃で吹き飛ばした。

魔物は数メートル先まで飛ばされたが、ゆっくりと立ち上がりグルグルと威嚇の声をあげている。

「もう話している時間は無いからよく聞け。俺はお前と約束した、お前の望みを手伝うと。ここでお前が死んだらどうする？俺はお前との約束を破ったことになる。いいか、男なら約束は必ず守れ、それがどんなに小さな事でもだ。」

「親父…」

俺を見つめる親父の目には、俺を裕に越える覚悟が感じられた。
：説得するつもりが、逆に納得させられちまった。俺の覚悟も弱かった訳じゃ無いけど、親父の覚悟のデカさを知ったら、無駄になんかできない。

「ガアアアア！」

魔物が大きく口を開いて飛びかかってくる。それを親父が剣で弾き、俺に言った。

「行け！何があっても生き延びろ！」

そして俺は親父に背を向けた。：振り向く事は、もうしない。

「親父、俺は親父の息子になれて：幸せだった。」

その一言だけを残し、俺は走り出す。後ろで親父の笑い声が聞こえたが、それを確認しようとは思わない。

俺の望みは、何時の間にか俺のものだけじゃ無くなってたみたいだ。親父のためにも、俺は走った。

火の手から。

魔物から。

生きるために、生きて望みを叶えるために。

――駆け抜けている最中、俺は頬に何かが伝うのを感じていた。

襲撃

夏休み最後の日。

空は晴天、こんな日は外に出ないとね。

そう思い立った私はすぐに友達を誘ったけど、みんな学生の大敵『宿題』と言う名の強大な敵と満身創痍で戦ってるらしい。

だから今は一人でショッピング、ちょっと寂しい。一人ぐらい終わっててもいいと思ったけど、見事に全員夏休みをエンジョイしすぎたみたい。

ちなみに私はもう出された宿題は全て終わらせた。いつもの勉強タイムに加えて、宿題タイムも追加されていたんだから、夏休み当初は絶望していたけど。

サボろうにも感の鋭い執事が部屋の外で見張ってるし…

まあ、そのお陰で新学期前日に切羽詰まって宿題やって、果ては徹夜…なんて事にはならなかったけどね。

宿題忘れたなんて事になったら、うちの担任のあの人は…

「おっ？何だアーニャじゃないか！」

品物を眺めながらそんな事を考えていた私の背後から声がかかる。

聞き慣れた声に振り向くと、赤髪で長身の女性が立っていた。

「先生！」

「うっす！久しぶりだな。お前は…あー、宿題は大丈夫なのか？」

私のクラスの担任教師、エレナ・スカーレットが歩み寄ってくる。先生は気まずそうに質問してきた。

やっぱりこの日は生徒にとって地獄の様な日である事を先生も知っているのかな。

私はクスクスと笑いながら全て終わらせたことを話し、ついでに友達全員に誘いを断られたことも話す。

先生は笑いながらも大きくため息を着いていた。

「はあー、あいつらは全く…つつても、俺も若い頃は同じだったか？しかし流石ドラゴニル家の令嬢様ともなると違うねえ、学内七位の実力は伊達じゃないってか。」

「そ、そんなんじゃないですよ！私だってやりたくてやった訳じゃない…」

そう言って私の頭を撫でる先生は、怒ると怖いけど、普段はとっても優しい。

自分の事を『俺』って呼んだりして口調も行動も男っぽい人なんだけど、見た目はすごく美人。胸も豊満だし…なんでこんな男男っぽい人がこんな羨ましいボディを持ってるんだろう？

当の本人は色恋沙汰には興味ないって言ってたけど、学校では男子・

女子ならず、他の教師までも憧れを抱いている。

私も、好き…とかそう言う感情じゃないけど、一人の女性として、先生は尊敬できると思う。

「どした、黙っちゃまって？」

「あ、いえっ！なんでもないです！」

私が大袈裟に首を振ったのを見て先生は笑っていた。

「まあそんなじゃ、友達全員に断られた寂しい寂しいアーニャちゃん
のショッピングには、俺が付き合ってやるよ。」

「あ、先生も一人なんですね。」

「ほっとけ！」

冗談を交えて笑談しつつ、私たちは沢山の人々で賑わう街でショッピングを続けた。

私達が住む街・イゴルドはグランシル国に属する五つの街の一つ。グランシル国は、一つ一つの街が大きく、人口も多い。中でも王都フェルネイドは最も人が多くて街も大きい。何度か行ったことあるけど、やっぱり王都と言うだけあって、住んでいる人も位の高い人ばかりだった。

私も一応、ドラゴニル家って言う貴族なんだけど、イゴルドで生まれ育った以上、フェルネイドぐらい気品の高い街はちよつと合わないかな。

「お待たせいたしました！」

可愛いメイド服を着たウェイトレスの女性が二人分の飲み物を持ってきてくれた。

私と先生は、小さな酒場で休憩していた。暗くて男達がガブガブお酒を飲む様などころじゃなくて、女性が入りやすいように華やかでテラスが開放されている人気のお店。

私はまだまだショッピングを続けたかったんだけど、先生が参っちゃったみたい。

ウェイトレスさんが飲み物を各々の前に置く。私がコーヒーで、先生がホットミルク。

先生がミルクとか：なんかコーヒー無糖！とかのイメージがあるだけに、そのギャップが可愛い。

私がそんな視線を向けていると、それに気付いた先生が一生懸命フーフーしていたのを止めて私を睨んできた。

「何だ、文句あるか！？俺がミルク飲んじやいけねーのかよ！？」

「いや、そんなこと言ってませんよ！ただギャップが可愛いなあゝ
って…ハッ！」

私は慌てて口を塞いだ。しかし時すでに遅し！

「ほゝお、アーニャ、お前はオレにどういう印象を持っているのか
な？ソコントコ詳しく聞いておこうか！？」

マズイ！！先生の両目がギラリと光る。

先生は自分を『可愛い』と言われるとキレる。過去に何かあったら
しいのだが…

「せ、先生落ち着いて…」

そして私が先生の放つ殺気によって縮こまり、押しつぶされそうに
なった時だった――

ドゴオオオン！

「キャアアアア！」

「うわあああ！」

爆音と共に響き渡るいくつもの悲鳴、そして酒場の外に溢れる煙。
その煙の中から血だらけの男性が這い出てきた。

その姿に私は急に気持ちが悪くなったが、幸い嘔吐することはなか

った。

「先生、コレって…」

そして先生の方に視線を戻すと、そこに先生の姿は無い。

慌ただしい店内をキョロキョロと見渡すと、倒れた男性のそばに近寄って行く先生を見付けた。

近づきたくはなかったが、訳のわからないこの状況では、知り合いと離れることの方が怖い。

「せ…先生？」

「この傷…ちっ、魔物か！」

恐る恐る声をかけるも、先生には聞こえなかったみたいだ。

店内が騒がしかったせいか、もしくは私の声が出ていなかったのかもしれない。

だけど先生の口から出た言葉は鮮明に耳に入ってきた。

「魔物…魔物ってどう言うことですか！？」

『魔物』そう呼ばれる生物がこの世界・バランティアには存在する。魔物は人を襲い、喰らう。私も校外授業やギルドクエストなどで街の外へ出て戦ったことがある。でも、こんな街の真ん中に現れたことなんて、見たことも聞いたことも無い。

それにこのイゴルドには、魔物の侵入を防ぐため、街を囲んだ防壁

と、見張りがたてられていたはずよ。

「見ろ、この背中傷を。」

先生が指し示した箇所には、大きく縦に裂かれた二筋の傷がつけられていた。

「防壁には見張りがいる。地上はおろか、空中の敵すら容易には潜り込めないだろう。…となれば、魔物は地中を移動できるタイプに違いない。これまでこの街の近辺に、そんな魔物はいなかったけどな。」

「それより先生、早くこの人を助けないと!」

先生の回答を聞いていたけど、これだけ酷い傷をおったこの人を放っておく訳には…

「無駄だ。…もう死んでる。」

「えっ…」

先生が、最初何を言っているのかわからなかった。でも、この人を良くみればすぐにわかったことだ。

私は怖くなり、後ずさったけど、置いてあったテーブルにぶつかって尻餅を着いた。

「人が殺されるのを見るのは初めてか…校外授業やギルドクエストも、お前ら学生じゃそんな高いランクは回ってこないからな。」

先生は私に背を向け、お店の扉へと向かって行く。

その手には細い銀色の槍が握られていた。何時の間に出したんだろう。

ううん、それよりも先生は何を…

「操風・護身（アーリア・オペラツイオーネ・ディ・プロテツジェ）」

お店の前に出た先生は、手をお店に翳し、呪文を唱えた。するとお店の周りを激しい風が吹き荒れ始めていく。

「先生、まさか…」

「ここからグランシル騎士団のイゴルド支部からだともう少しかかる。それまでは誰かが魔物を食い止めなきゃならない。」

先生は、立った一人で行く気だ、この騒ぎの元凶の元へ。

「なら私も…私も連れて行ってください！」

そんなことさせちゃいけない。私達を守るために、立った一人で行くなんて。私だって魔物との戦闘経験はある、足でまといにはならないはず。

だけど先生は首を横に振った。

「まだ早い。人の死を目の辺りにして、動揺を表に出すようじゃな。つま、今回はここで大人しく待ってる。」

やがて先生の姿は荒れる風の所為で見えなくなったしまった。

「先生…」

だけど納得が行かなかった。奢っている訳じゃないけど、私はイゴル魔法学校の第七位、それなりの自信はある。

気付いた時には身体が動いていた。先生の展開した風の防風壁に向かっていったけど、あっさりと抜け出せた。外側からの影響には強いけど、内側からは簡単に抜け出せるみたい。

お店の外に出たけど、そこにはもう先生はいない。けど少し先に感じる魔力、それは先生のものだ。

よしと頬を叩いて気合を入れた私は魔力を感知した方向へと駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5391y/>

皇帝の仮面

2011年11月18日11時24分発行